

五十嵐匠さん

●映画監督

保健師の礎を作った「じよつぱり看護」 花田ミキさんを映画化したい

ロシアのウクライナへの攻撃に世界中が注目している。市民の暮らす街に爆弾が落とされ、命が失われていく様子が刻々と伝えられてくる。新型コロナウイルスは世界中で猛威を振るい、人々の暮らしを脅かし続けている。そして、普通の暮らしの中にも孤独や苦しみがあがり、死がやってくる。命と健康を守ることを使命として与えられた保健師に何ができるのか。映画監督として、いま何ができるのか。

●取材文……太田美由紀(ライター)

命を助けられた2歳の僕

「コロナの影響を受けて1年9か月に及ぶ撮影延期を余儀なくされた映画『島守の塔』も昨年撮影を終えることができ、ようやく完成を迎えつつあります。沖縄返還50年の今年中の公開を目指しています」
五十嵐匠さんが監督・共同脚本を務めた『島守の塔』は、20万人が犠牲となった日本国内唯一の地上戦「沖縄戦」において、

軍の圧力に屈しながらも県民の命を守るうとした二人の男、そして戦禍で必死に生きる沖縄県民を描いた作品だ。

令和2年3月20日にクランクインした途端、スタッフと出演者11人がバタバタと倒れた。まだコロナのことがよく分かっていない時期だった。

「結果的には、検査をしたら全員陰性。熱中症だったことが分かりましたが、状況を鑑み延期を判断しました。私自身、予期せぬ空白期間ができて、メディアで『保健師』

という言葉をよく目にするようになり、あの新聞記事を思い出したんです」
それは、昭和35年6月7日青森県地方紙

「東奥日報」の「愛のリレーに命拾い」という見出しの記事だ。奥羽線の車中、はしかで高熱を出し、すでに呼吸が止まってしまった子をたまたま乗り合わせていた保健師の花田ミキさんが適切な処置で命を助けたというものだった。

「その時死にかけていたのが、2歳の頃の私です。それまで花田さんのことを映画に

しようと考えたことはありませんでした。でも、自分自身も歳をとり、近い人が亡くなっていくことや、コロナの感染が拡大していた状況で保健師の皆さんが頑張っていることも重なって、『花田ミキという生き方』というドキュメントを読んでみたんです。そこには、自分の身を顧みず、戦地で従軍看護婦として6年間尽力した姿や、青森県民の命と健康を守ろうと奮闘した彼女の波乱万丈の生き様がありました。これは今こそやらなきゃダメなんじゃないか。

花田ミキさんのことを映像で残したい。そう思って映画化を考え始めました」

「じよつぱり」な人生を描きたい

「映画は常に、なぜ今これをつくるのかが問われます。企画に賛同する人を集めるにも、予算を集めるにもそれが大きい。この状況下でも、ギリギリのところまで命を救う医師や看護師は世の中にも注目されていますが、予防的に命や健康に関わる保健師は

前面に見えてこない。作品はまだほんの少し動き出したばかりで、どんなものになるか私にも分かりませんが、『いま、もし花田さんが生きていたら、この状況で何をしたか』と、観た人が考えられるような作品にしたいのです」

花田さんには看護師としても保健師としてもいくつもの大きな功績があるが、中でも五十嵐監督が注目しているのは主に次の3つのことだ。

「1つはポリオ(急性灰白髄炎)です。昭和24年に八戸市で幼児96名の集団感染があったとき、彼女は八戸赤十字病院の婦長でした。まだポリオワクチンがない時代です。パニックが起こる中、りんごのこごー



Profile

●いがらし・しょう●

1958年、青森県生まれ。立教大学文学部卒業後、TBS『兼高かおる世界の旅』制作のため、アラスカをはじめ世界各国を回る。岩波映画・ドキュメンタリー映画監督の四宮鉄男監督に師事。1989年に16ミリ映画『津軽』で劇場映画デビュー。テレビやビデオの演出も手掛ける。『ナンミン・ロード』『SAWADA』『みずゞ』『HAZAN』『長州ファイブ』『半次郎』『二宮金次郎』など多くの劇映画、ドキュメンタリー映画を発表。『島守の塔』を沖縄返還50年の2022年公開予定。

つ抱えてたった一人で上京し、GHQに乗り込み、ケニー療法を持ち帰りました。花田さんは、青森県で実行するとともに、家庭でできることを新聞に掲載して広く伝えました。

2つ目に、青森県立高等看護学院（現在の青森県立保健大学）を開校しました。生徒を集めるために自らナイチンゲールの紙芝居を作り、県内の高等学校を回って看護教育の重要性を説いたのです。

3つ目は『もったら殺すな運動』です。その当時、青森県は乳幼児死亡率が全国でワースト1位でした。保健師たちを地域に密着させ、乳幼児死亡率改善に取り組んだ功績は大きいと思います」

僻地への「派遣保健婦制度」を提唱したのも花田さんだった。いまにつながる保健師の礎を築いた花田さん自身の91年の生き様は全て、彼女の信条であった「命を阻むものは全て悪」を体現していた。

「花田さんは自分のことより他人のことを考え、突き進んだ人。津軽弁で強情っぱりという意味の『じよっぱり』だった。数々の功績を残しつつも、一方で孤独で寂しさを抱えた生き方だった。そのこともしっかりと描きたいと思っています」



◎花田ミキさんについて

花田ミキ(1914～2006)青森県弘前市生まれ。青森弘前高等女学校（現在の青森県立弘前中央高等学校）卒業後、盛岡赤十字看護婦養成所で学ぶ。養成所卒業後、日赤県支部の看護婦となり日中戦争と太平洋戦争に三度召集され従軍勤務。八戸赤十字病院看護婦長時代、八戸市での伝染病ポリオの集団感染のため、単身上京。進駐軍に乗り込んでケニー療法を知り、小児まひ看護チームを作り奔走した。青森県の全国ワースト乳児死亡率を打破するため「もったら殺すな」運動を提唱。保健文化賞、東奥賞受賞

「花田ミキという生き方」東奥日報社刊・東奥日報社提供

『SAWADA』で感じた戦争

五十嵐監督のキャリアは『兼高かおる世界の旅』というテレビのドキュメンタリー番組から始まっている。その後、戦争や内戦に関連する作品に多く携わってきた。そのきっかけは平成8年のドキュメンタリー映画『SAWADA 青森からベトナムへピュリッツァー賞カメラマン沢田教一の生と死』撮影での経験が大きい。

「僕は戦争は全く知らない世代ですが、あの映画の撮影でベトナムに8年通いました。そこで初めて戦争の匂いを身近に感じ

さんは晩年、自費出版した『燠あつなお消えず』の中で、「戦争をした世代の、加害者のひとり」だと自分を評している。

映画化を実現するために

「最初は劇映画として作ろうと思い、一度脚本を書き上げたのですが、花田さんという人を役者が演じることが、天国の花田さんがどう思うだろうかとふと考えたんです。

実際に花田さんを知る人たちにお話を伺って、花田さんの生き様を出来るだけそのままに描いたほうがいいんじゃないかと考え直しました」

劇映画の撮影は、コロナの状況によって延期することで役者やスタッフの人情費だけで予算が莫大に膨らんでしまうという事情もある。

現在、映画のタイトルは『じよっぱり看護の人 花田ミキ』。ドキュメンタリー映画としての制作が動き始めた。

花田ミキさんを知る人たちも高齢化している。コロナの感染状況を見ながらできるだけ早く撮影を進め、来年には公開したいと考えている。

たんです。沢田が訪れたケサン高地では、コーヒー園のすぐ横に今でも地雷が埋まっていることを教えられた。沢田が亡くなったカンボジアのプノンペン病院では山賊に撃たれたばかりのカンボジア人の遺体が転がっていた。ホテルから100メートルの食堂に行くためだけに兵隊がライフルを持って護衛してくれた――。それらは、日本で暮らしていた僕にとって経験したことのないものでした」

以来、多くの作品を通して戦争や紛争を体験し、目撃した人たちの話を聞くほどに、そこから目を離せなくなっていく。

「沖縄戦の映画を作る過程で、『周りには全

「一口サポーターや企業協賛、県や行政への呼びかけをもとに映画制作費を集めているところです。クラウドファンディングはこれからですが、ぜひ読者の皆さんにもご協力いただきたいのです」

完成後はできるだけたくさんの人に届くよう、映画館に限らず、中学校や高等学校、大学、看護学校などの教育機関、全国各地の公立のホールや公民館などでの上映も計画 중이다。

「花田さんの生き様を描くことで、コロナや戦争など非常時のことだけでなく、僕自身が今抱えているような孤独感についても考えたいと思っています。それは、生きていく上で大切な親友や年齢の近い仕事仲間が亡くなっていく『寂しさ』です」

いま、この状況の中で、保健師に何ができるのか。ひとりの人間として何ができるのか。命を考えるきっかけのひとつとして、力を合わせられればと思う。

『命を阻むものは全て悪』 花田ミキという生き方』



著者：松岡裕枝
東奥日報社
1,320円（税込）

★ 映画 ★

『じよっぱり看護の人
花田ミキ』

〈公式サイト〉
<https://hanadamiki.com/>
協賛募集